

「立教大学における学習支援を考える」

日 時：2011年2月18日（金）14時00分～16時00分

場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館2階 第1応接室

司 会：

藤原 新 本学経済学部准教授
全学共通カリキュラム運営センター副部長

参加者：

伊藤 洋介 学生部学生生活課
柏原 成人 教務部教務事務センター
小坏 守 図書館利用支援課
根岸 千佳 メディアセンター
田村 未央子 新座キャンパス事務部教務課

○藤原 それでは始めたいと思います。本日のテーマは「立教大学における学習支援を考える」です。学生への学習支援は教員だけの問題ではありません。職員の方にもきちんと支えていただきながら学生は勉強をしているわけで、今日はお出席の皆さんに、どのような授業支援の取り組みを各部署で行っているのか、また、それにはどのような難しさや悩みがあるのか、一方でどのような喜びがあるのかを、自由にお話しただきたいと考えています。職員の方々の間でも、他部署ではこのようなことをやっているんだとか、同じ悩みを持っているんだとか、こういう点は改善できるんだということについて、幅広く情報交換していただきたいと思っています。今回は、各部署の代表として公式の見解を述べていただくということではなく、一人の職員として、身のまわりのこと、あるいは個人的な体験談でも結構ですので、ざっくばらんにお話しただけければと思っております。

それでは、最初に自己紹介を兼ねて、それぞれの学習支援の取り組みを簡単にご紹介いただきたいと思います。まず、図書館の小坏さんからお願いします。



藤原 新

学習支援への取り組み—各部署における事例—

○小坏 図書館利用支援課の小坏です。よろしく申し上げます。

図書館における学習支援という点では、主に3つのプログラムがあります。

1つは、授業内情報検索講習会で、先生方の授業に出向いて、図書館での図書や雑誌の探し方から、データペー

スの使い方までを含めて、90分間、コンピュータ教室での実習を含めた形で運営しているプログラムです。本年度は122回、延べ4,500名の参加がありました。また、図書館の自主講座として、授業内情報検索講習会の内容に加え、レポート・論文を作成する際の注意点、著作権法を守った上での引用などの著作権理解まで、実習も含めて3回に分けて行っている図書館活用講座があります。

さらに、個別相談にのって欲しいという学生に対して、ラーニングアドバイザー制度を設けています。これは、池袋キャンパスの図書館本館と新座キャンパスの新座図書館で、平日の午後、大学院生を指導役としてレポートや論文作成の支援を行うというものです。授業内情報検索講習会、図書館活用講座、そしてラーニングアドバイザーの3つのプログラムにより、学生の情報リテラシーの獲得支援をめざしています。

その他、現在、図書館ではメディアセンターの協力で約200台のノートブックパソコンの貸出を行っています。そういった意味において、3つのプログラムによる情報リテラシー獲得といったソフト面、パソコンやプリンタの提供と学習スペースの提供といったハード面の両方で、図書館の学習支援は成り立っています。

○藤原 ありがとうございます。活用講座は昨年何名程度の参加者がありましたでしょうか。

○小坏 池袋キャンパスについて言えば200人弱です。

○藤原 そうすると、検索講習会に来た学生の5%ぐらいになりますね。

○小坏 そうですね。

○藤原 分かりました。質問はまたあとで時間を取りたいと思います。次は教務事務センターの柏原さん、お願い

します。

○柏原 教務事務センターの柏原です。3つほど紹介したいと思います。

まずは、4月のオリエンテーション期間中に実施している、新入生を対象とした「先輩による履修要項読み方指南（以下、履修ナビ）」です。このプログラムでは、履修登録の方法や時間割の組み方などに疑問や不安を抱いている新入生が、身近な存在である上級生（主に2年生）に直接相談できるようになっています。授業を受ける前の段階でつまづいてしまう新入生をできるだけ減らそう、というのが目的ですが、新入生からの評価も高く、約40%の学生がこのプログラムに参加し、そのうち約80%の学生が「満足した」というアンケート結果が出ています。

2つ目は、先ほど紹介した履修ナビと同時期に実施している、新入生を対象とした「教員による履修相談」です。このプログラムでは、履修登録の方法といったテクニカルなことではなく、学習上の疑問や不安を抱いている新入生が、教員に直接相談できるようになっています。履修ナビと比べると新入生の参加率は高くありませんが、教員と1対1で話せますので、参加した学生の理解度や満足度は非常に高くなっています。

3つ目は、学習上の指導や助言を目的に実施している「アカデミックアドバイザー制度」と「オフィスアワー制度」です。どちらも学生の履修相談や学習上の相談に教員が応える制度ですが、アカデミックアドバイザーが実施している低単位取得者面談などを見比べると、学部によって規模が違うため、面談に至った率が高い学部もあれば、なかなか面談に結び付かない学部もあるようです。以上です。

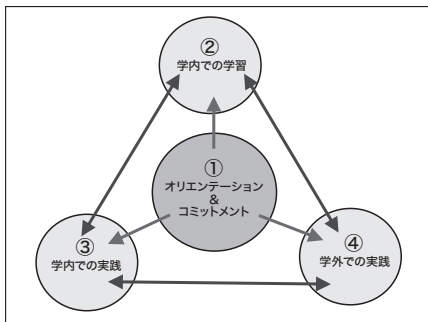
○藤原 ありがとうございます。それでは、学生部の伊藤さん。

○伊藤 学生部学生生活課の伊藤です。

学生部では直接的な学習支援は行っていませんが、今回は広義の学習支援を「学生の成長発達支援」ととらえ、学生部が行っていることを説明させていただきます。

今まで学生部は「他者との関わりの中で自分を見つめ、自分の生き方を考える」というテーマを持って、正課授業や正課外教育プログラムを行ってきました。2009年3月の「正課外教育」検討グループ答申では、「学習において、座学による理論や知識を習得する「キャンパス・エデュケーション」と実際の現場で学ぶ「フィールド・エデュケーション」の双方の往還運動が重要である」と述べられており、学生部の正課授業や正課外教育プログラムについてもこれにならって分類することは可能です。しかし、近年注目されている初年次教育やピア・サポートなどの観点を加えるならば、従来とは異なる分け方ができると私は考えています（下図参照）。

学生部実施の正課授業・正課外教育プログラムの分類



1つ目は「学生が大学生活を過ごすうえで必要な情報や知識を身につける、本学に適応する」をねらいとしたカテゴリ①「オリエンテーション&コミットメント」です。このカテゴリに該当するのは、1年生が参加者として参加する「新入生キャンピングin清里」や「新入

生1DAYプログラム」、1年次生必修のガイダンス「キャンパスライフオリエンテーション」などです。

2つ目は「実践に必要な態度や能力を身につける、体験したことを振り返り内面化する」をねらいとしたカテゴリ②「学内での学習」です。このカテゴリに該当するのは、学生部提案授業の全カリ総合B群科目「自己理解・他者理解」「対人コミュニケーション」や、正課外教育プログラム「クリエイティブ・コミュニケーション」などです。

3つ目は「学生等を支援する側として参加する」をねらいとしたカテゴリ③「学内での実践」、つまりピア・サポートのことです。このカテゴリに該当するのは、学生アドバイザーとして参加する「新入生キャンピングin清里」や「新入生1DAYプログラム」などです。

4つ目は「学外に出てさまざまな他者と出会う、学外に出て他者を支援する側として参加する」をねらいとしたカテゴリ④「学外での実践」、つまり「フィールド・エデュケーション」のことです。このカテゴリに該当するのは、「林業体験」「農業体験」「八ヶ岳環境ボランティアキャンプ」のように「立教キャンプ」と総称されるプログラムです（「農業体験」「八ヶ岳環境ボランティアキャンプ」はボランティアセンターと共催）。

これら4つのカテゴリの関連性についてですが、まず①は主に1年次生を対象としています。その後、②～④に参加していくこととなりますが、これらは学年によらず、自分に必要なものについていつでも参加できるようになっています。学年進行に沿って授業やプログラムを配置するのが一般的なのだと思いますが、学生部のテーマ「他者との関わりの中で自分を見つめ、自分の生き方を考える」を達成しようとするならば、②～④は単一の学年ではなく、

様々な学年の学生たちが集まることによってさらに効果が上がると考えています。

また、②～④に参加する順番についても、②に参加して得た知識や能力を③または④に参加して活かすという順番が望ましいようにも思えます。もちろんこれもひとつのやり方ですが、まず③・④のプログラムに参加し、そこで体験したことを内面化するために②に参加するという逆の順番もあってよいはずです。要するに、一人ひとりの関心や学びのスタイルに応じて知識の修得から入るもよし、体験から入るもよしということです。

このように学生部が行っている授業やプログラムは①の後、②～④を循環していくことで、参加した学生の一つひとつの体験や学びが深まっていく構造になっていると考えています。

○藤原 ありがとうございます。では、メディアセンターの根岸さん。

○根岸 メディアセンターの根岸です。よろしくお願ひします。

メディアセンターが学生に対して行っている学習支援は、大きく分けると2つになります。

まずはICTを使用した教育学習の支援。もう一つは、基本的なICT技術を身につけて卒業してもらうことを目的としたICT活用教育の支援です。

その2つを実現するためにメディアセンターが行っている取り組みが、大きく分けて4つあります。1つ目は基盤の整備として、パソコン教室や、授業を行う教室のマルチメディア設備の整備を行っています。またネットワーク基盤ということで、インターネットや学内LAN（有線LAN、無線LAN）環境を整備しています。さらに学生向けにノートパソコンやマルチメディア機器の貸出しを行っています。

2つ目には、自学自習環境の整備を

しています。基本的な技術を身につけさせるためのITスキルアップ講習会の開催や授業で使われていない時間にパソコン教室を自習室として提供しています。



根岸 千佳

ラーニングスペースを提供して学生が授業の影響を受けずにパソコンを使って学習ができるような環境も整備しています。あとはeラーニング教材も提供し、学内だけではなく、自宅からでも勉強ができるような環境を整備しています。

3つ目は、授業支援環境の整備として、授業支援システムCHORUS（コーラス）の提供と、先生が授業で配布した資料やレジュメをインターネット上、もしくはイントラネットにアップして、学生に公開することができるサイバーラーニングの提供をしています。

最後にキャンパスライフ支援として電子メールやWEB、グループウェアなどの環境を整備しています。

○藤原 では、最後になりましたが、新座キャンパス事務部の田村さんお願いします。

○田村 新座キャンパス事務部教務課の田村です。

新座キャンパス事務部教務課でも、池袋の教務事務センターと同じ取り組みをしています。履修ナビや履修相談、アカデミックアドバイザー制度、オフィスアワー制度、低単位取得者面談などを、学部の先生方と協力してやっています。

新座の特徴ということでお話をすると、池袋と事務組織の違いがあり、新座キャンパス事務部の中に教務課と学生課があるので、例えば学習支援で何か関わりのあった学生が、学習という枠以外のところでも問題を持っていたことが判明した時などに教務課・学生課が連携して学生を支援していくことが可能です。新座はコンパクトである分、そういう体制をとることができる、そこが特徴かなと思っています。

あとは、この4月に新しく教室棟が建ちますが、新棟建設やそれに伴う既存施設改修の計画にあたっては、新座事務部だけでなく、※ランチ部局も含めたキャンパス全体のゾーニング整備を考えました。例えば、来年度後期には教務課と学校・社会教育講座事務室が同じ窓口に並んで配置されるなど、ある程度のワンストップサービスを目指しています。各部署が物理的に近距離にあることがメリットとなって、計画もかなり細かいところまで実際の担当者が関わり、みんなできりあげていくという土壤があるので、それが学生支援や学習支援というところにもつながっています。池袋と比較してそういった特徴があると言えるのではないかなと思います。

○藤原 具体的に何かありますか。

○田村 今後取り組むものとして、学習支援スペースの設置があります。新棟を建てるにあたり、既存の教室棟の中に入っている事務部局を無くし教室棟は教室棟として使うとか、そのようなゾーニング整備、再配置を考えています。その一環として、現在パソコン教室がある6号館の2階を学習支援スペースという位置づけにするということが決まりました。学生数もこの5年で倍ぐらいになりましたので、図書館の座席数も足りなくなり、6号館の1階の図書館を拡張して2階にも図書館

のスペースを増やしますが、図書館拡張スペース以外の空きスペースもあわせてフロア全体を新しいスタイルの学習支援スペースとして考えていったらいいんじゃないかということになり、検討委員会を発足したところですよ。

新座では、例えば事務部会にもランチ部局の方にも出席していただき、日ごろから意見交換ができるような環境がありますので、従来の枠にとられず、池袋を見本にして何かをするのではなく、新座ならではのものを作っていきたいと考えています。



田村 未央子

「学生による学生の支援」と職員の関わり

○藤原 ありがとうございます。お話を聞いていて、どこの部局もいろいろなことを一所懸命やっていた感じ、これまで知らなかったこともいくつかあって、勉強になります。

みなさんのお話の中に共通してたくさん出てきたことですが、例えば教務の履修ナビや、図書館のラーニングアドバイザー、それから、あとは学生部のキャンパスのところでいろいろな学年の学生に手伝わってもらっているということですね。

学生アドバイザーもそうですね。メディアセンターもアルバイト学生が活躍していますよね。そういう話を伺っていると、どうも一つのキーワードは、学生が学生を支援する。それを教員、

※ランチ部局：池袋に本部をもつ事務部局のこと。

職員がどのように組織したり支援したりするか。いわゆる学生のピア・サポート、これが一つのキーワードなのかなと思っています。

図書館のラーニングアドバイザーはどのぐらいのニーズがあるのでしょうか。また実際に担当している大学院生や利用した学生の評価はどうですか。

○小坏 ニーズについては決して高いとは言えないですね。というのは、なかなか来客者が来ないような状況があるからです。例えば1日ゼロという日もあります。解決策として、例えば広報の改善などいろいろやっているのですが、あとは先生方にも学生に呼び掛けていただくようお願いしてきました。開始して3年ほどたちましたが、残念ながら大きく数字は伸びてこないのが現状です。

なぜ伸びてこないかという、極端な言い方をすれば、これは必要がないからなんです。なぜかと思ったら、例えばレポートや論文について、授業の中で求められるものがそこまでシビアになっていないということが原因ではないかと考えています。学生のレポートを受け取った時に、いつもがっかりする先生方が多いと聞いています。ただし、それはいつも学期末試験の際に提出してもらっているもので、こんなレベルなのかと思ってがっかりするけれども、次に指導する機会はない。また履修者数が多い授業の中で、全員のレポートに赤を入れて返すことが実際可能なかという、それもできないというようなところで日々が過ぎてしまっている。また、学生のほうもこの程度でいいんだというところに慣れてしまっていて、4年間それが進行して、例えば、レポートの体裁や著作権の理解という基本的事項についての内容を十分に理解せずとも、単位の取得ができてしまうということで、ニーズが

生まれていないのかなと思っています。

アメリカの大学では、ライティングセンターといった組織で学生による学生のレポート・論文作成支援が盛んに行われており、予約を取るのが大変なようです。つまり、その授業の中で、レポートや論文作成において、高いレベルの要求が教員からあり、その要求を満たすためにはライティングセンターの助けが必要であるわけです。しかし残念ながら、立教大学を含め、多くの似たようなサービスを開始している大学では、必ずしも機能していない。日本でも、ICUは図書館資料の貸出数が極めて多く、それらを用いたレポート作成が頻繁に行われている好例と聞いています。なぜそれができるのかと言ったら、1つの授業の履修者が10人程度ですから、先生方が十分フォローできる体制があるということで、うらやましく思います。立教は1クラス10名というわけにいきませんから、あとはT.A.の活用が考えられるのではないかと思います。

○藤原 そうですね。アメリカなどでは、T.A.の活用ができているから、そういう授業形態がうまくいくのだと思います。

柏原さんから紹介のあった履修ナビについて、先ほど参加した学生は満足度が非常に高いということのを伺いましたが、この学習支援ということで考えると、提供している側の学生の成長ですね。それによって上級生が成長するというねらいも一つあると思うんですけども、いかがでしょうか。

○柏原 「先輩による履修要項読み方指南」というタイトルのとおり、上級生は新入生からの質問に対して履修要項を示しながら回答する、一緒に確認することになっているので、協力してくれる上級生に対しては事前にガイダンスを実施しています。ただ、その内容は、

昨年度からの制度の変更点、自分たちの時とは違うので注意して下さいとか、こういった質問を受けた際には履修要項の何ページで確認してあげて下さい、といったもので、協力してくれる上級生自身が何か成長できるような要素が果たしてどこまであるのか、実は私自身も疑問に感じているところではあります。言い方は悪いですが、大学からこれをやってねと言われたことだけをやる。上級生自身の裁量の余地がない。彼ら自身が何か困って、苦労して解決策を導き出して、というようなプロセスがないので、あまり彼ら自身が成長できる場ではないのかなと、私自身は思っています。



柏原 成人

○藤原 間違ったことを教えてもらっては困るというのがありますからね。
○柏原 正しい情報をしっかりと伝える、ということも大切なことだとはいえそうです。
○藤原 田村さん、何か補足することはありますか。
○田村 スタッフとなった上級生はとでも一所懸命やってくれるんですよね。事前研修の時もきちんと話を聞いて、質問も多いですし、やるからには、という責任感みたいなものはすごく感じます。ただ、ナビ自体は1日か2日の単発で終わってしまうプログラムです。例えば関西の私大では、半年とか1年の単位で上級生が新生に大学での学習の仕方を教えたりする、ピア・サポート制度のようなこともやっています

が、そのような形で、もっと長期的な活動になれば、もっと上級生の側の成長というのねらいにできるのかもしれないですね。

○藤原 単発で終わってしまって、なかなか制度としてつながっていかないというのは、どこに原因があるのでしょうか。

○田村 やはり職員側の余力が足りないというのはあるかもしれません。学生部がやっている「新生キャンプin清里」などもそうだと思いますが、上級生にスタッフになってもらってプログラムを実施するためには、やっぱりそれ以上の労力をかけて育てなければいけなくて、それにかかる余力はなかなかないですね。自主的に学生の活動として育てていったら一番いいんですけど、なかなかうまくいきません。

○藤原 学生を育てるには相当のエネルギーがいりますよね。仕掛ける側の余力というのも大事ですよ。

今ちょっと学生の話が出ましたが、特にキャンプの中には少人数でやっているものがありますよね。少数ではあっても参加した学生が育つという点ももちろん大事ですが、その学生がコアになり、あるいはある意味でリーダーになって、周りの学生に波及していくことも狙いの一つだと思うのですが。

○伊藤 「新生キャンプin清里」や「新生1 DAYプログラム」で学生アドバイザーを務めた学生については、前者は半年、後者は1ヶ月半をかけてコミュニケーションやグループ・ファシリテーションの能力を身につける研修を行っていますので、プログラムが終わった後にゼミやクラブ・サークルなどでリーダーになってもらいたいと期待しています。

ちなみに2010年度「新生キャンプin清里」で学生アドバイザーを務めた学生たちが学生アドバイザー体験を通し

て、どのような変化が見られたかを調査したことがあるので簡単にご紹介します。

学生アドバイザー 20名に対し、事前研修スタート時と「新入生キャンプin清里」後で各自の自尊感情がどのように推移したかを調査したところ、全体の平均値では事前研修スタート時よりも「新入生キャンプin清里」後の方が5ポイント程度上がっていました。また、人数でみても20名中16名がポイントを向上させていました。また、自身の変化について本人がどう思うかコメントしてもらったのですが、そこからは自己受容を深めた、自己有能感を高めた、他者への共感性を深めたといった様子うかがい知ることができました。

次にいわゆる「立教キャンプ」について述べます。現在「立教キャンプ」は、先に挙げた「林業体験」「農業体験」「八ヶ岳環境ボランティアキャンプ」の他に、チャペル主催の「奥中山ワークキャンプ」「日韓キャンプ」、ボランティアセンター主催の「ボランティアトレーニングin榛名」が行われています。

昨年度は立教学院創設135周年記念行事のひとつとして、「立教キャンプ」に参加した学生10名に集まってもらい、彼らの体験談をまとめた『un paso』という冊子をつくりました。また、本年度は「立教キャンプ」参加者やこれから参加しようと思っている学生たちを集め、自分たちの体験や今の気持ちをわかちあうプログラムを行い、約70名の学生、教職員が集まりました。このプログラムも学生たちが中心となって運営してもらいました。

このように「立教キャンプ」で得た体験を、学生が自分だけの思い出にとどめるのではなくて、自らの学生生活に還元していくことを、学生部では他の部署と協力しながら促進しています。

○藤原 そういふ仕掛けをするという

のは、学生部としても相当のエネルギーが必要なわけでしょう。その辺の悩みはどうですか。

○伊藤 できるかぎり学生たちの主体性を尊重したいのですが、その一方で大学側にもやってほしいことや譲れないことがあります。こちらから言い過ぎてしまってもよくないし、かといって、何も言わないと「楽しく盛り上がるう」で終わってしまう可能性もあったりするので、大学側の期待と彼らの希望をうまくミックスさせながら、学生たちの力を引き出すにはどうしたらいいだろう、と毎回苦労しています。

○藤原 メディアセンターにはICTの能力が高い学生がたくさんいて、相当程度の仕事をされているという話を聞いたことがあります。

○根岸 そうですね。数年前までは理学部の学生や大学院生も多く、非常にICTスキルの高い学生がたくさんいました。最近はノートパソコンの貸出し業務もメディアセンターの学生スタッフが対応しており、総勢70人ほどになるので、全員のICTスキルが高いという状況ではないかも知れません。メディアセンターとしては、一定レベルのICTスキルを持ち、他人をサポートすることに意欲がある学生を採用しています。先ほど田村さんも、職員に余力がないとお話しされていましたが、メディアセンターも学生スタッフが70人にもなってしまうと職員では管理しきれないので、今は業務委託の方に管理をお願いしている状態です。学生スタッフ募集への応募人数も多いので1次面接は学生スタッフがいき、学生視点で採用にかかわってもらっているというところがありますね。

採用後は先生からの問い合わせや学生からの素朴な質問など、いろいろなレベルの対応が必要になるため、基本的には上級生が下級生を指導する体制

になっていますが、最近では自主的な勉強会も開催しているようです。トラブル事例や問い合わせへの回答方法や対応方法を情報共有しているのを見て、感心しています。

○藤原 自主性が育っているという感じですね。今、ピア・サポートというカタチでいくつかお話をいただいたんですが、ここはとくに聞いておきたいというような点はありますか。

○小坏 ピア・サポートに関しては、メディアセンターのノートパソコンの貸出窓口では、技術的な対応もしてほしいと思います。単にノートブックの貸出サービスをしているのではなくて、技術的なサポートもしていますよというところを言えるようなレベルを要求したいという思いはあります。

○根岸 学生スタッフの全員が高度な技術レベルを有しているわけではありません。ただ、みなさん、質問されたときに答えられないのが辛いと感じたみたいで、それもあって今、自主的な勉強会が始まっているので、もう少し待っていただくと、技術的な対応もできるようになるのではないのでしょうか。

○藤原 学生は、失敗して、「しまった、やらなきゃ」となりますよね。履修ナビが、利用者からすごく好評だというのは、自分で厚い履修要項を見て、自分だけではわからなくて、「助けて」といって助けてもらう。それで「ああ、よかった」となりますよね。そういう意味では、さっき学生部の伊藤さんのところで、「知識の修得から入ってもいいし、体験から入ってもいい」とおっしゃった。一方で小坏さんからは、「ニーズがないのではないか」という話があった。「しまった」とか、「駄目だ」という体験があって、「助けて」となってからの支援というのはずっと入っていきますよね。そういう支援のタイミングというのはやはり大事だと思うん

ですけれども、いかがでしょうか。学生が失敗するのを待っているわけにもいけないと思うんですが、それぞれの支援プログラムのタイミングということに対して、お考えになっていることがあればお願いします。

○伊藤 私は入学する前後とオリエンテーション期間後がポイントになると考えています。まず、入学前後についてですが、これは「新入生キャンピング清里」と「新入生1DAYプログラム」が大きな役割を果たしていると思います。入学前、新入生の多くは大学生活をイメージできずに漠然とした不安を持っていますが、学生アドバイザーが話を聞いてくれるだけでもだいぶ不安は軽減されるのではないのでしょうか。実際、参加した新入生のアンケートを見ても、学生アドバイザーへの感謝の言葉が非常に多いですね。

ただ、両プログラムの参加者は合計しても250～300名程度で、それ以上の受け入れは現状では困難です。その他の学生に対してどういう支援が可能だろうかという悩みは、正直なところありますね。

次にオリエンテーション期間後について述べます。オリエンテーション期間は4月10日前後まで続きますが、その間に全員が大学に適応する一歩を踏み出せるわけではなく、友達ができないと悩んだり、大学の勉強が自分や社会にとってどういう意味を持つかがわからずモチベーションが上がらない学生も少なからずいると思います。ですので、上級生が相談に乗るようなプログラムを5月や6月にもう一度できたらいいなと感じています。

○藤原 そのようなプログラムは、あまりないですよ。それは支援する側のパワーとか、条件が大きいわけですか。

○伊藤 4月のオリエンテーション期

間は様々なプログラムやガイダンスが目白押しです。学生たちも大変だと思いますが、運営する私たちもこれらの行事を運営するのに大変なエネルギーを使っています。ですので、何かしたいと感じていながらも、なかなかオリエンテーション期間後のことまで手が回らない、というのが正直なところで

○藤原 そういう意味では、5月、6月は大事ですね。図書館での授業内情報検索講習会や活用講座というのは、どの時期が多いんですか。

○小坏 授業内情報検索講習会は年度初めが多いですね。レベル1とレベル2に分けていて、レベル1は図書館の基礎的な使い方、レベル2は、それを習得した方がより深いレベルで情報検索について学ぶというように分けているんです。学部1年生については、年度の初めはレベル1の実施だけにさせていただくようお願いをしています。大学での学習をまだ始めている学生に高度なデータベースの使い方を教える機能しないので、昨年度からレベル分けによる方式に変えています。

○藤原 さっきのレポートの話です。一つのタイミングは3年の後半から4年生、学生は卒業論文を書く時期になって慌てますよね。ちょうど就職活動にかかってしまう時期だという難しさもあるのですが。

○小坏 卒論で慌ててラーニングアドバイザーのところへ来る学生もいます。ゼミに入っているけれど、そもそも論文の書き方というのを習ったことがない、どういう体裁で書いたらいいかわからないという質問も多いですね。レポート作成のいろはみたいなのがまず抜けてしまっている学生がいるのかなと感じています。

授業内情報検索講習会は、年間122回の開催で、4,500人の受講者がいるんで

すが、実際に学部生の年間図書貸出冊数は平均約7冊なんです。学部によっては約4冊です。なぜ学生が本を使わない、もちろん情報は本だけではなくインターネットもあるんですが、使われないというのは、やはり情報を集める必然性を授業の中で生み出していないのではないかという思いがあります。



小坏 守

それはなぜなのか、おそらく先生方が授業をしっかり行っていて、丁寧なレジュメを用意していて、レジュメの他、必要な情報が全てメディアセンターの協力でネットにアップされていて、学生はそれを頼りに丁寧にまじめに授業に参加すれば、よい成績がとれるという形になっている。それはそれで決して悪くはないんですが、いざ就職活動の時にエントリーシートが書けない、自分で情報を集めて分析して自分で何かを発信していくという能力が足りなくなっている原因のひとつとなっているのではないかと考えています。

昔の大学の授業というのは、先生方はそんなに丁寧ではなくて、自分でやりなさいというところが結構あったと思うんですが、今の時代はなかなかそういうわけにいかないのか、手取り足取り過ぎるのではないのかと思っています。もっと自分で行動するような形態の授業がつけられるべきではないかと思っています。

○藤原 いま、小坏さんが言われたこ

とは非常に重要なので、あとでもう一回取り上げたいと思います。支援の時期、同じエネルギーをかけるのなら一番効率的な時期にというのがあると思うんですよね。何かアイデアはありますか。例えば、入学前後も確かに大事だけれども、そのエネルギーを、やるプログラムを削って5月末にやることだってアイデアとしてあるわけですよ。

○田村 新入生は4月にすごく詰め込まれます。例えば、分厚い履修要項を隅から隅まで理解するのはなかなか難しいので、履修ガイダンスで約2時間話を聞くわけです。ところが2時間話を聞いてもなかなか理解できず、さらにオリエンテーション期間にいろいろなことを一気にやるわけです。だから、受け入れ可能な容量を超えてしまっている状態です。少し時期をずらすというのも、ありなのかなと思います。

○藤原 私が以前オリエンテーション委員会を担当していた時に、オリエンテーション期間を6月ぐらいまで広げて考えてみたらどうかという提案をしたことがあります。ただ、入学当初にやりたいことも、たくさんあるんですよ。

○小唄 図書館は新入生オリエンテーションプログラムから撤退しました。なぜなら、詰め込み過ぎであるし、授業も受けていない学生に図書館といっても、今まで自分が経験していた図書館と大学の図書館では性格が違うこともあり、授業開始後の必要性が出てきた段階で行えばいいということで、図書館としては、オリエンテーション期間は新入生に少し余裕を持たせてあげた方がよいということで決断をしました。

○藤原 そうですね。さっき職員の方々のほうも、そこでいっぱいいっぱいになってしまうというのもあったけど、

学生もそこでいっぱいいっぱいになってしまっていますね。しかも、4月、5月は上級生に対するサービスはほとんどなく、1年生だけに集中してしまっています。それはそれで大事ですが、どこで学生が困っているのかということも考えた仕掛けもあるといいかなという気がしています。

○根岸 デジタルネイティブと言われている現在の学生たちは、インターネットや携帯電話で気軽にいろいろなことを調べることはできると思うので、何か分からなかったとき、つまりいたときに、その場ですぐ対応できるようにしてあげたいと、メディアセンターは思っています。ですので、あまりタイミングということについては考えていません。いつでも、どこでも、どこからでも調べられる、サポートが受けられるような体制を目指しています。

どこまで支援をするかー線引きの難しさー

○藤原 それは逆に言うと、どこかを決めるのではなくて、困ったタイミングで対応できるということだから、究極のタイミングでのサポートかもしれないですね。少し話を進めます。さっき小唄さんが言われたところで、学生支援をするときに、「ちょっと授業が丁寧すぎるんじゃないか」という話がありましたよね。実は私は地域スポーツの指導を長いことやってるんですが、指導者講習会ではいつも「教えすぎてはいけない」と言われています。「ヒントは与えるけれども、答えは自分で考えさせなさい」とよく言われるんですよ。そういう意味で、授業をやるときも、できるだけ、あまり親切なレジュメをつくらないし、サイバーラーニングもあまり利用しない。こんなことを言うと怒られてしまうかもしれないけど。授業ではどんだん話す。話したことは

書くんだよと。板書も親切にはやらないよということを書いていて、そういう授業をしています。ただ、学生に理解してもらうためにはどういった授業のやり方がいいのか、これは常に悩むところなんです。「親切すぎるかどうか」ということに関連して、お話を伺っていると、やっぱり立教の職員はものすごくまじめで、熱意もあって、能力もあるなあ、と感じます。いろいろなことを学生にやってあげたいというのがあって、もしかすると、親切過ぎるというか、教え過ぎるというのか。授業だけではなくて、支援プログラムの中でもそういうこともあるのかなど。授業の話から方向転換したようで申し訳ないけれども、とくに学生部なんかたくさんプログラムをやっているらしい。さっきも、「言い過ぎてはよくない」という話を伊藤さんはされました。

○伊藤 私は「対人コミュニケーション」「クリエイティブ・コミュニケーション」といったコミュニケーション能力の向上を目的とした授業やプログラム、学生アドバイザーの育成などを担当していますが、いずれもラボラトリー・メソッドによる体験学習を基本にしています。これは、誰かが教えるのではなくて、実習で参加者たちが体験したことから、自分自身で気づき、考え、学んでいくものです。ですので、学生の主体的な参加を阻害してしまうような「甘やかし」はしないように心がけています。

それと「新入生キャンプin清里」や「新入生1DAYプログラム」の学生アドバイザーには、参加する新入生をお客様扱いして、何でもやってあげるといった姿勢では臨まないでほしい、新入生とはいえ彼らに主体的に行動できるように促進するのが、学生アドバイザーの役割なんだよ、と繰り返し言い続けて

います。

あと私は登山をするクラブ・サークルの指導を担当しています。現在、8団体あるのですが、各団体のリーダーたちが集まって「山岳関係団体リーダー連絡会」を組織して、下級生への研修プログラムなどを運営しています。やはりここでも、学生たちには私たち職員の指示を待つのではなく、主体的に行動するように指導しています。

授業やプログラムでも、クラブ・サークルでもこういうスタンスで接していると、学生たちは私たちの期待にちゃんと応えてくれますし、逆に彼らから教えてもらうこともたくさんありますね。そうした姿を見ていると、彼らには「自分で考え、決断し、行動する力」やその力を駆使して「自ら成長していく力」があるんだなと実感します。また、彼らを甘やかし、これらの力を発揮できなくさせるのではなく、もっと引き出せるような支援をしたいと思いますね。



伊藤 洋介

しかし、そもそもこういう授業やプログラムがあることや、クラブ・サークル活動を積極的に支援すること自体が甘やかしだと言われてしまうと困ってしまいますね。そういう意見も理解はできます。でも、それをあえてやるのが本学らしさかなとも思います。また、家庭や地域が持つ教育力の弱体化や部活動等を通した集団体験の不足などで、社会性が身につけていないか、自己肯定感が十分に育まれていな

かったりと、大学生になる準備が整う前に入学してくる学生が増えています。そうした状況の中では、私たちの積極的な関わりも必要なのではないのでしょうか。いずれにせよ、非常に気持ちが揺れますね。

○藤原 どこまで学生の自主性に任せて、どこまで支援というかたちでかわるのか。その線引きはなかなか迷うところですよ。さきほどのメディアセンターの話でも、「困ったときに支援する」というのがありましたけれども、そのあたりはどうですか。

○根岸 メディアセンターは、そういう意味では本当に困っている学生に対してすごく丁寧に対応してあげたいと思っている半面、基本的なことが普通にできる学生に対しては、環境は完璧に整備したから、あとは自分で考えて自分で調べて取捨選択をして成長して欲しい、その過程で何か問題が発生したり、メディアセンターから提供しているものに不備があったときにはすぐにサポートしますよという考え方かなと個人的には思っています。

○藤原 なるほど。メディアセンターの場合、学生は、自分でできるようになりたいという意識をもっている。だから、その手助けということですよ。

○根岸 そうですね。

○小坪 立教はそういういった対応がとても丁寧で、多様なプログラムを提供して、手間のかかることをやっているというのは、学生にとっては恵まれたことで、とてもよい取り組みを行っている私も思っています。

また、元に戻ってしまいましたが、立教の学生の自習時間、復習時間が非常に少ないというアンケート結果が出ていますが、そういう中でも成績がとれていて多様な学習支援のサービスを用意してもそれらが生きてこないということについては、言い過ぎかもしれ

ませんが、やはり授業の形態にも少し問題があるのではないかと思います。

○藤原 いろんなことを事務局局で考えるときに、一つは、マンパワーの壁というのがある。それから、時間的な壁というのもある。それから、言い方は不適切かもしれないけれど、教員の壁というのもあると思います。壁というのか、教員の意識が障害になっていることもあるかもしれない。具体的に何か感じていることがあれば、お話しいただけますか。

○柏原 壁、と感じたことはないですね。逆に、職員はもっと教員のことを知らないといけな、と感じています。たとえば、「勉強についていけないです」と窓口に相談に来た学生に対して、我々は「アカデミックアドバイザーという制度があって、勉強の相談に乗ってくれる教員が決まっているから相談にいきなさい」とか「オフィスアワーという制度があるから研究室に行ってみなさい」といった対応をします。でも、その後学生と教員がどういったやりとりをしたのか、教員が学生に対してどんなアドバイスをしたのか分からないんです。

○藤原 会えたかどうか分からないと。

○柏原 はい。ノートの取り方などを指導しているのかなと想像はするんですが、実態はわからない。勉強を教えるのは教員ですし、我々職員が学習支援として学生たちにやってあげられることは何なのかなと。

○藤原 事務局局の方は、学生と教員がどういうやり取りをしているのか、全然分からないというのが、そういう意味では一つの壁ではありますよね。

○田村 新座キャンパスのほうが、その辺はもう少し教員と職員の交流があるという感じ。私は池袋の教務事務センターにもいたので、池袋の様子

も知っているつもりですが、新座にきて感じたのは教職員の距離の近さです。先生方が教務のオフィスに自然に入ってくるし、私たち教務課員も講師控室に頻繁に顔を出しては「先生、〇〇くんはどうしていますか」とか、そういう感じの交流が、キャンパスのサイズのおかげで成り立っているんです。

○藤原 キャンパスのサイズの問題もあるし、そういう建物の物理的な仕掛けというの、大切なものかもしれないですね。キャンパスのゾーニングを考えると、教員と職員が協働して学生を育てていくという視点も大事かもしれないですね。そういう新座の経験を他袋にも伝えていただけるといいのかなと思います。

たとえば、PCのスペースの話がありました。小坏さんは京都出張からお帰りになったばかりですが、同志社大学にはそういう学生支援をするスペースがあると聞いています。教員とか職員がどのようにかかわっていくのか、お分かりますか。

○小坏 もちろん立教とも組織的には変わらずに、学生部長や図書館長は教員で、その部下は職員であるという点では変わりませんが、教員部長が学生の集まる場や学習支援スペースに大きな関心を寄せているようでした。同志社の寒梅館での取り組みで興味を持ったのは、今、新座キャンパスで動きがあるような、図書館の中に学習支援スペースをとというだけではなく、学生が集まる場にグループワークの場をつくらせている点にあります。学生の目につく場所に、それも教室的なスペースではなくて、学生がくつろげる多様なスペースを持っていて、ただ学習支援のスペースだけというのではなくて、学生が何か成果を発表できる場もあるんです。もっと言うと、ピアノが置いてあってピアノのコンサートができたり、

そういう学生が一番集まりやすい場に個人やグループのための学習スペースが設けられている。学習だけではなく、昨日集まっていた学生に話を聞いたら、フリーペーパーをつくるために、今みんなで集まって議論をしているんですという。片方の部屋では学習しているんだけど、その隣ではフリーペーパーの打ち合わせをしている、それも、予約制でもなく、空いていればどうぞ自由にお使いください、4時間以内ですという形で、非常に自由に使われている、われわれだったらたぶん管理したがつまるところが、かなり自由に使われている。同志社大学には初めて行ったのですが、同志社大学のキャラクターというか、いろいろなことが自由だということ、管理に重きを置いていないということ、そういうところが機能しているところを面白く思いました。

○藤原 立教にも5号館のアイビーの横のところとか、10号館のコモンゾーンみたいところがありますよね。

○小坏 ああいう場もあるんですけど、もっとリラックスできる場も設けている点で違いがあります。グループワークの部屋も完全にクローズドなものあれば、通路に面したところだけオープンになっているものがあり、多様な空間が用意されていました。

立教大学も、14号館の1階に、最初は何もなかったようでしたが、新品ではないようですが、椅子やテーブルを集めたら、あそこでグループワークが芽生えているんですね。そういう場を大学としても少し計画的に用意してあげる。7号館のB棟が今どう機能しているのか、ここもそのような機能を目指して教務部と学生部とで考えてつくったんでしょうけれども、どう機能している、学生はどう認識しているのかということ、逆に関心しています。

あとは、新座キャンパスでは、図書館はそういったスペースをつくろうと思っていたんですが、学部からもそういったものをつくる考えがあり、現在共同で何かをやっていくという動きは見えているのですが、同志社大学においては、そういったところが成功している事例として見ることができました。

○藤原 7号館については、柏原さんにご説明をお願いします。

○柏原 7号館B棟は、1、2限、曜日によっては3限までは英語ディスカッションの授業で使用しています。それ以降は基本的に空き教室ですが、サブゼミとか正課に関するものであれば教務事務センター、正課外に関するものであれば学生部が窓口になって貸出を行っています。その際の条件は他の空き教室と同じですね。

○藤原 では、小畑さんの言われたような、自由に空いていればどうぞということではないんですね。少なくとも、形式的には。

○柏原 そういった話があったというのは聞いたことがありますが、少なくとも今年度はそういった運用の仕方ではなかったです。

○藤原 新座の新しいところはどこですか。

○田村 新座では、これから検討を始めるところなので、まだ決まったことは何もないんですけど、アイデアとしては、サブゼミみたいな感じで議論したり、調べものをしたり、資料をみんなでつくったり、そういうようなことができる小グループ用のスペースが複数あって、その小さなスペースから出てきたところにはもっと人数が集まることもできる広いスペースがあり、そこにはプレゼンの練習ができるような機材がちゃんとそろっていたらどうかな、というような意見があります。図書館だと飲食禁止だと思うん

ですけれども、そういうことも許されているような空間、そして閉鎖的でない、例えばガラス張りのブースのような空間にするというイメージです。

新座キャンパスの卒業生を対象にしたアンケートで、身につけたかったことは何かという質問項目の回答に「プレゼン能力」というものがありました。新座キャンパスの3学部は演習が必修かそれに近いような科目になっていますが、社会に出たときにプレゼン能力をもっと身につけておきたかったというデータが出ていて、先生方にそのあたりを聞いてみると、グループでまとめて発表をというときに、メンバーで集まって勉強したり、発表の練習をしたりできるような場所があまりないので、結局、誰かが一人で作ったパワーポイントを見せて発表して終わり、みたいなことは確かによくあるね、という話がありました。ですから、まずはそういうようなことができるスペースを提供すること、そしてその次に必要なこととしては、そのような場所があっても思ったような使われ方をしないということにならないように、例えば図書館がやっているラーニングアドバイザーとか、そういった今あるソフトをうまくからませて使えるといいのかなと思っています。新しい学習支援スペースは6号館1階の図書館と内部階段でつながった2階にできるので、配置としてもそういったことがやりやすいと思います。池袋のモデルにしても



らえるようなものをつくれたらいいなと思っています。

○小唄 そういった意味では、昨日見てきた同志社大学の寒梅館というのは、かなり自由に使わせているので、果たしてみんな学習の空間として使っているのかといたら、試験期はもう誰もしゃべらずに使っているし、そうでない時期は、もう少しゆるいようになっているそうです。同志社大学と立教大学のレベル差がどれくらいあるか分からないですが、立教大学においても学生の自主性を信じ、あとはその場の設定、その場のあり方みたいなものを見せてあげれば、なんとか機能するのではないかと思います。

○根岸 現在メディアセンターから、学生が自由に使えるパソコンを常設しているラーニングスペースを提供しています。パソコン教室を自習室として開放する際は私語が禁止になっているので、ディスカッションなどをしながらパソコンを使いたい学生がこのラーニングスペースで、複数人で討議したり、プレゼンの練習をしたりしているのを見かけます。ラーニングスペースはオープンスペースなので、この様に本来の使い方から大きく外れた利用方法はされないのかもしれないですけど、自由に使っている場所として与えられれば、同志社大学の学生だけではなく、立教大学の学生も管理しなくてもきちんとした使い方ができると思います。

「継承」の難しさ

○藤原 やっぱある程度クローズなところだと管理しなくてはいけなやか、やっぱ管理責任という問題もありますよね。みんなから見えるところでやると、学生同士でなんとなく管理し合うようになるのかなとも思います。

そういう「つくり」や管理の仕方は、もしかすると教員と職員と学生との関係を反映しているのかなと。新座キャンパスの学生支援スペース、楽しみにしています。

ぜひ私が伺っておきたいことが1つあります。今日お集まりいただいた5名の方の話を聞いていても、本当に皆さん熱心にやっつけていらっしゃる。私は教員になってここに来てもう十数年で、学生のときから含めるともう30年になるのですけれども、職員の方も相当な責任感を持って自分でいろいろなことを背負って頑張っておられる。ただ、そういう一つ一つのプログラムが、それぞれの部局の職員の方の能力や資質に相当程度依存しているという側面もあるように感じているんです。職場の中でどのように支援を継承していくのか、同じレベルの支援を長期にわたってできるのか、あるいは、改善していく仕事を長期にわたってできるのか。こういうのは、やっぱり各部署でのテーマとしてあり得ますよね。

○柏原 マニュアルや研修制度を整えて、細かいところまで業務継承をすることも大切ですが、むしろビジョンというか、大学もしくはその部署が何を目指しているのかを示し続けることが重要な、と。結局我々職員には人事異動があるわけで、プログラムに携わる人は変わらざるを得ないし、入学してくる学生の気質も変わってくる。なので、業務そのものはどんどん変わっていくべきだと思っています。ただそこにはやはり、ビジョンのようなものがないと、立教としての良さが失われていってしまうと思います。

○藤原 プログラムの継承より、ビジョンの継承のほうがより難しいかもしれないですね。

○小唄 図書館は、事務部局ではあるんですが、学習支援という点では教育

にも少しかかわっていて、学習支援のコンテンツづくりとかいうことも含め、実際に指導にあたるというところになると、学部卒の職員では十分ではないということもあります。大学院である程度、研究に関わったというレベルの人でないとやっていけないというところまで来てしまったような気がします。図書館はそういう人を育てるのか、そうした能力を持った人を採用するのか、もしくはそういう人を外部委託していくのか、または、それらを組み合わせ、今後の学習支援体制に備える必要があります。

○藤原 図書館ではそういう特殊なスキルが必要だと。もちろんメディアセンターでも独自のスキルが必要だというのは同じですよ。そうしたスキルの継承とともに、さっき言われたスピリッツの継承というのかな。それは言葉だけで伝えられるものでもないですよ。立教らしい支援というのはこういうものだと。そのあたりの意識を職場の中で育てていくということは、やっぱり考えられるわけでしょう。

○小唄 そうです。それはミッションだと思います。では、図書館においては何なのかといたら、学生の情報リテラシー獲得支援だと考えています。学生が情報リテラシー、情報の使い方というものをいかに持つのかということや、どうやって支援していこうかということや、図書館の中で確認し合う必要があるのだと思います。

○藤原 メディアセンターではどうですか。

○根岸 専門的な知識・スキルが必要になる部分もあるので、現在は中途採用の経験者しかメディアセンターにはいませんが、個人的には、他部署の方がメディアセンターに異動されても、特に学習支援という部分では業務を継承していくことは可能だと思っています。



す。

それはなぜかという、技術的な面は業務委託の方達がサポートしてくれますし、専門的な知識・業務知識の新たな習得はどこの部署に異動になっても必要になってくるのと同じだと思っているからです。また、立教大学のメディアセンター員として常に学生の視点、教員の視点を忘れずに、学生が何を求めているのか、教員が何を求めているのかを考えることをよく上司に言われるんですが、こう言ったビジョンに対してどういう方向性でやっていくんだというのがあれば、やっていけるのではないかなと思っています。

○藤原 学生部ではどうですか。

○伊藤 皆さんの話を聞いていて、学生部は異質かなと感じていました。課外活動支援業務や奨学金業務については、皆さんがおっしゃったことと同じことが言えると思います。しかし、コミュニケーション関係のプログラムでトレーナーを務めるとか、学生アドバイザーを育成するといった場合、知識や技術だけでなく、その人の人間性も問われてきます。こういう類の業務はコミットできる人とできない人がでてきてしまうので、コミットできそうな人材をいかにして発見し、育成していくかを考えなければならぬですね。

○藤原 1つのことを2人でやると継承しやすいけれども、1人が抱え込まざるを得ないような人員配置になると、他の人がやっていることが見えなくな

るというのはよくある話ですよ。でも、伊藤さんの今の話を聞いていると、大丈夫なのかという気もします。どうなのでしょう、この人がいなくなったらとても保てないということはありませんか。

○根岸 正直に言うと、私の上に2人、長年メディアセンターを支えてくれていた方がいて、1年ごとに他部署に異動してしまいました。その2人は本当にいろいろなことをやってくださっていたんだなということを、今ひしひしと感じて、つらいなと思う部分がありますね。その分、人がもっとたくさんいてくれるといいなと、そちらの問題になる気はするんですけど。

○小坏 メディアセンターから図書館に異動してきた人が一人います。

○根岸 そうですね。

○小坏 非常に大きな力になっています。たった一人の人材が図書館の情報環境などを整えてくれました。図書館にいるスタッフにはそういう能力が必ずしもあるわけではないので、専門能力のある方が入ったことで、図書館のICT環境の推進に大きな力となっています。そういう意味では、本当に人の力というのは非常に大きい。

○藤原 そういう意味では、異動はすごく大事ですよ。それでそれぞれの部署がよくなる一方で、特定の人にあまりいろいろなものがくっついちゃうと、それはそれで難しい面も出てくる。いいことを沢山やることは大事なんだけど、それを安定して継続的にできるようなことを、一方で考えなければいけない。

それでは、さらに何かここで聞いておきたいこと、言っておきたいことはありますか。

○小坏 先ほどはスペースの話でしたが、あとは機材ですね。例えば学生のコピーセンター、それは試験期のノー

トコピーのためのものではありませんが、そういったコピーセンターとか、あとはプレゼン用の大型プリンタを使えるといったファシリティの部分在全学をあげて考えたいと思います

○藤原 難しいですね。どこに置くかというスペースの問題もありますよね。

○小坏 学内にコピー機を増やすために、他部局に相談に行ったときには、「街にいっぱいあるんだからいいじゃない」と言われたことがあります。その通りなのですが、昨日の同志社大学にもやはりコピーセンターがありました。

○根岸 各部署で様々な取り組みをして、いざ、学生が勉強しようという気持ちになったときに、さきほど小坏さんが言っていたこととつながると思いますが、学習する場所の提供が出来ないという、スペースの問題も発生していると思います。

また、様々な支援を検討・提供はしていますが、本当にそれは学生が求めている内容なのかどうかというのがすごく分かりづらいなと思っています。さきほど田村さんが卒業生にアンケートをとって学生の要望が分かったと仰っていましたが、実際に学習支援をされる側である学生が何を求めているのかを大学主体で調査していくと支援内容が学生のニーズに応えたものになっていけるのではないかと思います。

○小坏 図書館の講習会では、先生方にも、学生にもアンケートをしているんですが、だいたいそういうアンケートはみんな「よかった」という回答がなく、効果の測定が難しいのです。それが、例えば、OPACの検索だけやっているわけではないですが、そういう講習会をやって、立教大学の平均貸出冊数が年間7冊という結果で成果があったのかというと、あったのかどうなのか考えてしまいます。図書館としては、年間120回の講習をやっていく負

担はとても大きいです。あとは、本当はもう少し先生方ともコミュニケーションをしていかなければいけないのでしようけれども、それがなかなかできていません。もちろん深く話す先生も何人かはあるんですけども、本当に一部です。そういったコミュニケーションをもっと深めていかなければと思います。

○藤原 私も反省することがいっぱいあります。情報検索講習会をやっていたいただけれども、1年たつと学生は忘れてるんですね。

○小坏 入職10年目の職員対象のレポート研修というものがあるんですが、そこへも図書館から派遣されて、大学運営にかかわる資料紹介、情報検索、レポート作成、著作権理解の講習を行っています。最初に「OPACの使い方を知っている人、使っている人」と聞いたたら、誰も手が挙がらなかったですね。つまり、図書館情報を誰も使っていないということです。図書館には大学経営や大学職員にかかわるような資料が多数あるのですが、残念ながらそういうものが全く使われていない。一般的な読み物の利用以外の使い方としての図書館を使う文化が日本にはあまり根づいていないのかなと感じています。図書館はそういうところから進めていかないといけないのかなとも思っています。

○藤原 話が授業の方に向かいましたが、教員との関係ということではどうでしょう。

○伊藤 教員と職員の協働という点では、事務部局提案の全カリ総合科目が例として挙げられます。学生部でも「自己理解・他者理解」「対人コミュニケーション」を行っています。ボランティアセンターの活動はとても参考になると思います。全カリ総合科目で「ボランティアアクティビティ」「点字から

考える人権」「手話と人権を考える」を展開し、その後のさらなるステップアップの場、実践の場として「点字中級講座」や「実践！バリアフリー講座」を正課外教育プログラムとして実施しています。これは正課・正課外が有機的に結びつきつつ、基礎的スキルの習得から応用、活用までの段階的な機会を提供している成功例のひとつだと思います。さらに本年度からは手話が言語教育科目に加わるという全国でも稀な展開も見せており、教員と職員の協働の一つの方向性を示すものといえるのではないのでしょうか。



○藤原 今のいろいろな話を伺っていて、学生とすべての授業がどうかかわるかというのと、教員とどうかかわるかという時に、先ほど小坏さんが言われたように、授業の中でこのようにやってほしい、あるいは、教員がなかなかいろいろな支援プログラムについて知らないし、だから学生にもうまく伝わらないという面がある。一方で、教員の立場からいえば、実は、授業の中でいろいろな工夫をしていて、昔の大学の講義と比べて相当程度変わってきているけれどもそうしたことを必ずしも職員の方が知っているわけではない。教員と職員の間でのコミュニケーションも大切だと思うんですね。

当たり前の話になりますが、やはり先ほど職員の間での情報交換という話があったけれども、教員と職員との間ではさらになかなかそういうチャンス

ルがない。オフィシャルな場だけではなくて、先ほど言われたように、教務課に教員がどんどん入って行って「どう？」と。そういういろいろな場面での情報交換は、学生を支援する意味でも必要。特に立教みたいいろいろな支援を丁寧にやろうとしているところでは、やはり大事なのかなと思います。

さきほど小塚さんからT.A.の話がありました。授業のやり方と言うと、教員が全部負ってしまっているから、レポートの採点も大変だ。とにかく100人のレポートを集めたら、1週間、2週間ではとても返せない。それはT.A.をうまく活用できれば、レポートの課し方もずいぶん変わってくる。図書館ももっと使われるようになりますよね。

○小塚 そうですね。図書館で提案させていただいた全カリの授業運営の手伝いをしていたことがあるんですが、T.A.の方が授業に付いているものの、出席をなんとなくとっているんだか、とっていないんだか分からない。ペーパーをそのまま配るだけ。全く訓練できていなくて、学生の席への案内すらも充分にできていない。彼らは何のためにいるのかなとすごく疑問に思いました。逆にT.A.を授業運営の枠組み、例えば、提出されたレポートにコメントをつけるといったことをしてもらって、教員一人で100名分のレポートを読み、コメントをつけるのは難しく、そういったところでT.A.が活用されればと思っています。

早稲田大学では、大学院生向けの授業に、アカデミックスキルにかかわる授業があって、そういう授業を受けた方がライティングセンターで指導にあたっています。そういったものを参考にしながら、T.A.の育成を行い、本当の意味での授業協力が行われればと考えています。

○藤原 そろそろ終わりの時間が近づ

いてきました。一つは、やはり立教らしい支援ということ。自主性を育てるとか、自立を支援するという目標はどの大学でも同じだけれども、それに対するアプローチは大学それぞれに違って、立教は立教らしいアプローチを皆さん模索しているのだと。そういう中で、やはりそれぞれの部局で「立教らしい支援」の根本のところを継承して行って、形は変わってもいいから、スピリットにふさわしい支援をしていくということもよく分かりました。今日の座談会は大学教育研究フォーラムのための企画でしたが、このような情報交換の場が継続的にあるといいですね。それでは、最後にもう一言、何かあればご発言ください。

○伊藤 皆さんの部署でも学生たちの力を活用されていますが、なかなか彼らを育成する余力がないとおっしゃっていました。学生たちにコミュニケーションの研修を受けさせたいと思われる場合は、ぜひ学生部のプログラムに参加するように勧めてください。また、皆さんの部署で行っている学生向けの研修に学生部職員が出張し、協力する、といったこともできるのではないかと考えています。そうして私たちが持っているスキルを他の部署にも活用していけたらいいなと思っていますので、ぜひご検討ください。

○小塚 図書館の窓口スタッフ、私も行きましたけれども、救命救急講習会ではお世話になりました。

○藤原 それでは、そろそろ時間になりましたので、座談会を終了したいと思います。今日は貴重なお話をありがとうございました。

○一同 ありがとうございます。